

氏名	申 裁和
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第26号
学位授与日	平成30年3月8日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	反復について 一草間彌生とルイズ・ブルジョワの作品における反復イメージについての考察一
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 尾長 良範 副査 武蔵野美術大学 教授 田中 正之 副査 武蔵野美術大学 准教授 荒川 歩 副査 元 栃木県立美術館 技幹兼学芸課長 小勝 禮子

## 内容の要旨

第1章では、草間彌生の作品に表れる同イメージの反復が彼女の内的な反復性に密接に関係しているという仮定の下、彼女の作品の中に見られる反復イメージの意味について考察する。

彼女が諸文献にて繰り返し言及しているように、彼女の代名詞ともいえる反復イメージは、草間の体験した個人的な幻覚、また、それによる不安や恐怖などの感覚をスケッチブックに写すことから始まった。

このように生まれ出た原型のイメージは、彼女が渡米した以降にも繰り返し表れ、彼女が身を置いていた時代や空間とも照応して各々異なるコンテクストを生み出した。

異なるコンテクストを帯びながらも、各々の作品はイメージの類似性を持ち、根本的に同様の力(抑圧する力に対する解放しようとする力の緊張感)を放っているように見える。草間のイメージとこの力はとても強く合体されていて、切り離すことができない。なぜなら、彼女のイメージが、彼女を襲った幻覚と不気味な感覚、それに対しそれから逃れるために写し出した行為から生まれたからだ。言い換えれば、彼女のイメージの根源はこういった非現実的で不気味なイメージだ。

夢のように幻想的な力を抱いているイメージを徹底的に反復、再生する草間の作品世界を、「反復」をキーワードに彼女の代表イメージ、「ドット・網の目・花、そして突起状の彫刻など」を中心に考察する。

第2章では、ルイズ・ブルジョワの作品に繰り返し用いられるモチーフを中心に彼女

の作品世界を読み解く。

ブルジョワの作品を、同一形態を基準に分類してみると、彼女の作品世界に流れるナラティブが読み取れる。これは彼女が経験した衝撃的な出来事、そしてそれによる心的外傷を克服する過程に似ている。

ブルジョワの外傷的記憶とそれから派生した感覚は、彼女にとって非自発的に物理的な形を借りて表出され、これらはそれ以降に、彼女が美術活動を始めてから作品内の表現として溶け込まれていった。

このように彼女の外傷的な経験は作品のモチーフと密接に結びついている。例えば、初期に登場する「目」の形の作品は外傷的な出来事を「見」ていた「目撃」者の意味として解釈されると同時に、以後、登場する「目」の形は、見ていたが見逃してしまった眼前の出来事を今度こそは目撃しようとする意味としてとることができる。このような反復の構造は、フロイトが研究した心的外傷の患者が繰り返して同じ光景を目睹することと類似している。

ブルジョワは自身の個人的な経験に基づくイメージとオブジェを積極的に反映させ作品を創ったが、それらが孕んでいるものは不意に襲われた人間が経る心的原型とその転移を示唆している。

本章ではブルジョワの反復モチーフやイメージを中心に、彼女の作品における反復するイメージやその意味を考察してみる。

第3章では、草間彌生とルイズ・ブルジョワの作品における反復の様相の比較を通し、二人の作家が反復的に作家自身を襲ってくるもの、例えば草間においては幻覚と恐怖、ブルジョワにおいては幼年期の抑圧された記憶そしてそれが伴う感覚、を克服する手段として用いた美術作業が、二人の作家がどのように異なった立場を不意に追われた経験に対して取っているのかについて分析してみる。

第4章では、思わずつい行ってしまいう反復行為が、美術的な反復表現として転換され表現になっている筆者、本人の作品を中心に反復される表現とその反復の性格について語る。

## 審査結果の要旨

### 論文の概要

本論文は、草間彌生とルイズ・ブルジョワという現代を代表する二人の女性アーティストの作品に焦点を当て、両者に共通する「反復」という表現形式を考察したものである。主題やモチーフの反復や連作による反復、反復的な身体的動作といった反復の諸相を捉え、それらの表現形式と意味とが分析され、反復的表現が自己の解放や主体性の回復と結び付

けられていることが明らかにされている。また、学位申請者自身の美術家としての表現の問題として、オブセッショナルで反復的な身体的動きによって描くという行為の意義が、草間やブルジョワの作品分析を踏まえた上で論じられている。

#### 論文の内容と構成

論文は、草間を扱った第1章、ブルジョワを論じた第2章、二人を比較して考察した第3章、そして自身の作品に関する第4章によって構成されている。

第1章では草間の作品における反復表現が扱われ、ジクムント・フロイトの『快感原則の彼岸』における「反復脅迫」の概念や「fort (いない) / da (いる)」の議論を参照しつつ、幻覚やそれによる精神的衝撃といった体験への対抗として、自己を守るためになされた表現が、草間の反復の出発点にあることが示される。とりわけ《残骸のアキュミュレーション (離人カーテンの囚人)》(1950年)を、その造形や鑑賞者との関係(鑑賞者が覗き見るような構造)など細部まで読み解きながら、それが渡米後の諸作品の原型的作品となっていることを明らかにしている。初期からどのように反復が出現していったのか、その過程が丁寧に論じられている点は、本論文の綿密な作品分析の成果であるといえる。さらに水玉や網目などのモチーフや、突起物によるソフト・スカルプチャーといった草間の代表的な表現形式の意味も再検討され、それらが相互的かつ発生論的関連があることが指摘され、たとえば、網目と水玉がポジとネガの関係にあることや、ソフト・スカルプチャーを「無限の網目」の変形であることが示される。また草間作品における鑑賞者を巻き込む構造を指摘しつつ、彼女の表現が作者自身の解放(ないし治癒的行為)に終わらずに、広く世界を解放する方向へと向かう普遍的力を持っていることが明らかにされている。

第二章ではブルジョワの反復的表現が論じられている。ブルジョワの全作品を通覧したうえで、全体としてそこにあるストーリーが読み込めるとした指摘が、本論文における重要な指摘である。ブルジョワの作品は、過去の記憶を起点として制作されているが、その表現は、「見る」、「恐れる」、「怒る／復讐する」、「記憶の場に戻る」、「直す」という動作を示す言葉によって分類されうるとし、これらの行為的含意を持つ表現を展開させることによって、ブルジョワ自身の、そして広く人間全体の主体性の抑圧から回復へと向かうストーリーが表現されていると論じられている。たとえば、目をモチーフとしている作品について、ここでも『快感原則の彼岸』を参照しながら、「見ていない(見逃す)目」から「目撃する目」への展開という意味が読み取られ、またジル・ドゥルーズの『反復と差異』に依拠して、ブルジョワの『セル』シリーズを、「記憶の咀嚼」のための「追想」(「反復脅迫」を止める方法)として分析し、反復の治癒的作業としての側面が捉えられている。

第三章では、ここまでの作品分析を踏まえて、草間とブルジョワの作品における反復表現の共通点と差異とがまとめられている。両者の作品には、どちらも恐怖の対象を外形化し、それによって恐怖や不安を制御しようとしたという共通性がある。そして恐怖からの解放のために身体性が、そして反復的な身体の動きが要請されたことが指摘されている。

草間にとってそれは、「作って、作って、作り続ける」ことで自己を消滅させるために、そして「彫刻は身体であり、私の身体が彫刻である」と語ったブルジョワにおいては、自身の彫刻を通して恐怖を再び体験し、そこから切り抜けようとしたと論じられている。

#### 論文の成果

本論文の最大の成果は、草間とブルジョワの作品を、反復表現という視点から捉え直して作品を分析し、その意味を明らかにしているところにある。そして、個人的体験や私的な精神的問題を出発点とした作品が、なぜ個人の治癒や自己満足では終わらずに、広く人々に訴える力を持つような普遍性を持つものとなるのかという、なぜ作品を制作するのかという問題に関わる制作者としての根源的な問いを探ろうとしたことにある。その意味で、美術家であり作品制作領域を専門とする者にふさわしい充実した内容の博士論文であると言える。

#### 審査の経緯と結果

2018年2月22日(木)に公聴会と審査委員会を開催した。審査委員会では、公聴会での発表および質疑応答を踏まえて、審査委員から質疑を行い、学位申請者に説明を求めた。質疑応答の終了後、審査委員による最終的な審議を経て、可否を判定した。

公聴会では、論文に関しては、草間やブルジョワの作品が、なぜ個人的な治癒に留まることなく作品として価値を持つようになったのか、それについてどのように考えるかという質問がなされ、また提出された作品に関して、徐々にイメージがぼやける方向に向かうことの意味が問われるなどした。いずれの質問に対しても、学位申請者から自らの考えが示された。

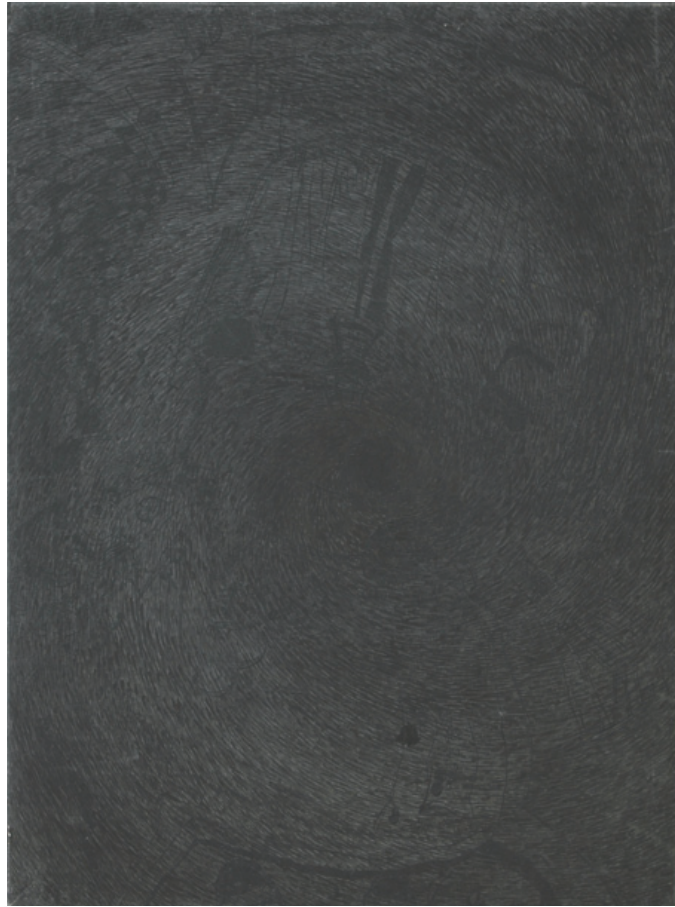
審査委員会では、議論の土台としてフロイトの理論のみに依拠していることの問題と、現在の理論を十分に踏まえていない点が指摘され、今回の研究テーマが今後の実践のなかでさらに深められることが求められた。また、自作に関する作品分析や説明がいささか不十分であることや、日本語表現にいくつか難点があることも指摘された。しかし、草間やブルジョワの作品解釈においては、多くの外国語文献を含めた先行研究の深い理解や入念な作品分析に基づいてその意味が読解されており、その点は、非常に高く評価される内容であることが確認された。

以上のような質疑応答と審査を経て、最終的には審査委員全員一致で、本論文の意義と価値を認め、博士号の学位にふさわしい学術的レベルを有するものと判断し、合格と判定した。



口止め

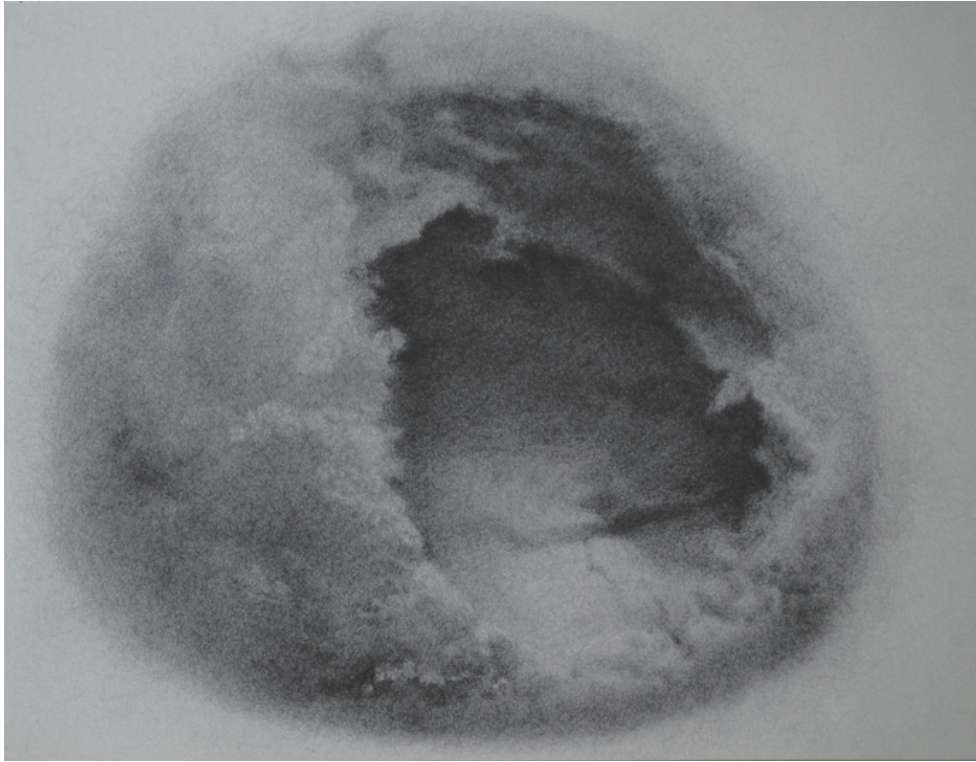
2006年 岩絵具、ペン、墨、水干、雲肌麻紙 32×41cm



ただいま  
2007年 岩絵具、アクリル、墨、和紙 70 × 52cm

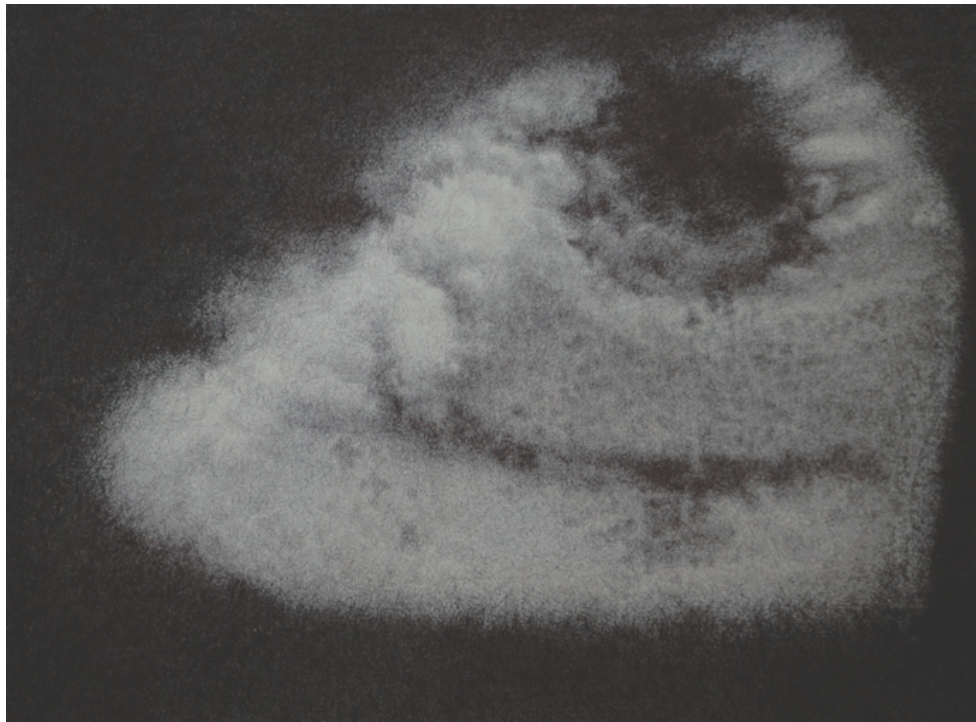


untitled  
2009年 ボールペン、アクリル、ケント紙 135 × 235cm



untitled

2012年 ボールペン、雲肌麻紙 130 × 150cm



untitled

2011年 ボールペン、雲肌麻紙 60 × 80cm